

「馬場小室山遺跡フォーラム」第91回ワークショップ

【復興の原動力！パブリック・アーケオロジー2018】

馬場小室山遺跡とまちづくり環境の「かかわり」から、「山田湾文化」の復興パブリック・アーケオロジーへ

＜馬場小室山遺跡研究の新展開—縄文塚(「環提土塚」集落)の終焉から地域文化の解体にみる広域連動の解明—＞

知識・経験・思考・領域等にみられる現代的限界(建て前の×や+)からの知的解放(本音の÷や-)を目指して活動します！

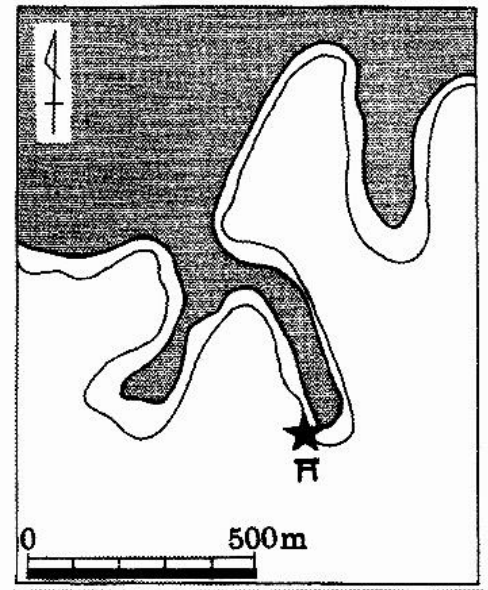
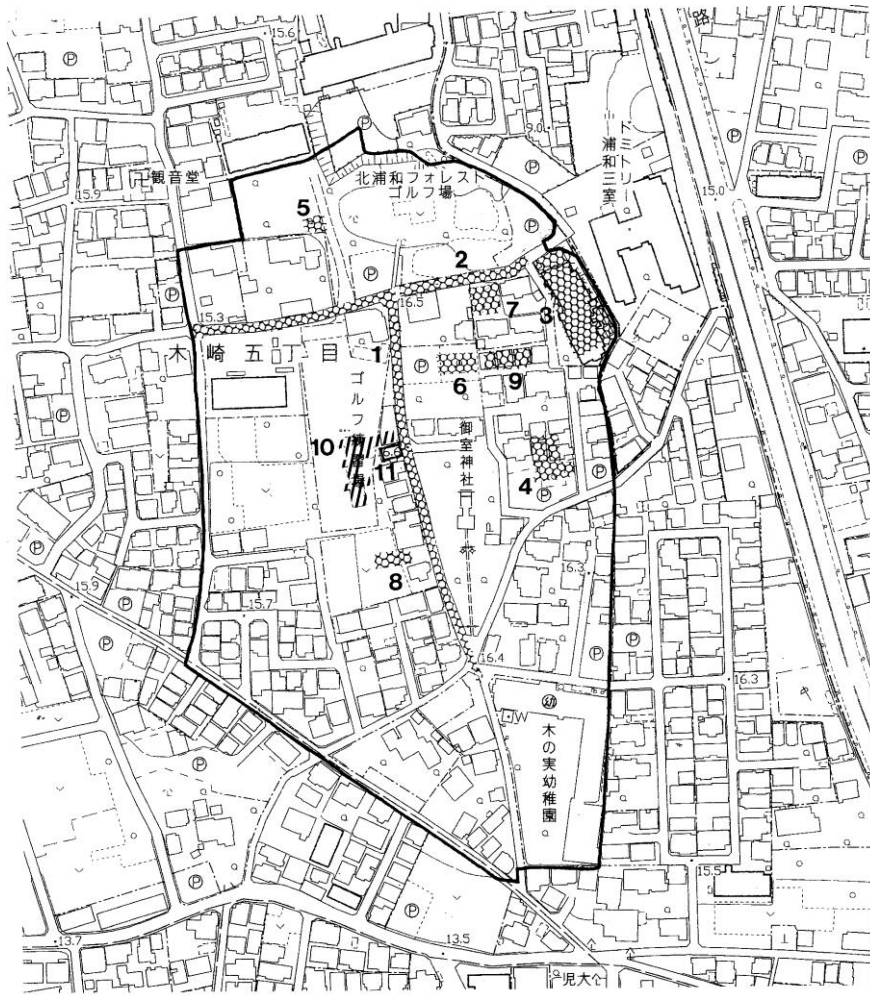
新展開1 (ムロ1) ～ (ムロ10) は以前のレ ジュメ参照	「ムロさま」の 「限界領域」打破 (墓場の公共性にみ る墓式と葬式、及び 「人骨集積」の真相)	馬場小室山遺跡「第51号土壇」から展望する縄文時代の葬墓式と「土器社会論」—「ムロさま」の「累積型改新土坑墓」と「積葬墓」から探る「追埋設型土器棺集積墓」への途— (ムロ10)「再帰型再葬墓」の風習と巨大「再葬祭場」の出現【『利根川』40】 (ムロ11)山田町浜川目沢田Ⅰ遺跡における「大洞C1式」の「土器集積の風習」 (ムロ12)「人骨集積」から「土器集積の風習」(祭式と葬式の統合)へ【『古代』142】 (ムロ13 予告)「土器集積の風習」(祭式と葬式の統合)から「再葬壺棺墓」へ
新展開2 (オム1) ～ (オム5) は以前のレ ジュメ参照	「オムちゃん」と 「ムロさま」との 「限界知識」打破	土偶と土面／顔面付土版／人面文土器等の関係、そして容器形土偶／顔壺へ (オム6)大宮台地における人面文土器の類例追加:地獄田遺蹟2例、小林八束1遺蹟1例 (オム7)「祭式土偶」から「葬式土偶」(祭式と葬式の統合)へ【『利根川』40等】 (オム8 予告)「鬲腹信仰」は「ムロさま」から容器形土偶や顔壺の土坑墓へ 【番外1】富山県の「オムちゃん」 【番外2】青森県の波状口縁頂部の内面に顔面を装飾する縄文時代後期後葉土器 【番外3】青森県の「縄文の微笑」(写真) 【番外4 予告】 福島県七社宮遺跡の人面文注口付土器
新展開3 (シオ1) ～ (シオ3) は以前のレ ジュメ参照	「シオ(塩)もん」の 「限界経験」打破 縄文時代の製塩土 器は「採鹹・せん ごう土器」が真相！ 固形塩の物流では なく、「大形魚塩蔵 品」・「汽水系塩 煮品」に留まらず、 濃縮海水を内陸 で希釈する「淡水 魚(含む特産ウナ ギ)塩煮」の普及 か？	「製塩土器」の確立から製塩遺跡の操業へ、爆発的普及の晩期社会と「定住制」の定着 (シオ4)下布田遺跡の「製塩土器」在地性は古鬼怒湾型変遷との乖離！／枯れたアマモを特 定の場所に集めて乾燥させる「塩草場」の存在、及び天日と地熱(熱砂)利用の採 鹹・せんごう工程に相応しい「製塩土器」鉢形態の確立 (シオ5)宇都宮市刈沼遺跡からは寺野東遺跡よりも多数の「製塩土器」が検出し、在地で淡水 魚の「塩煮」が浮上。鬼怒川流域の口縁部形態は下布田遺跡(板状工具＋ナデ調 整)とは大きく異なり、「古鬼怒湾系列」である口縁部水平ヘラカットが定着 (シオ6)三陸北部における「製塩土器」の年代と系統(1)久慈市大芦Ⅰ遺跡の長胴深鉢形態 と僅かな出土点数に注目した「採鹹・せんごう土器」の提唱 (シオ7)六十軒遺跡の「製塩土器」二者(古鬼怒湾ケズリ系列VS無文ナデ系列)の意義 【『利根川』40】 (シオ8)古鬼怒湾で後期から発達するウナギのブツ切りによる「ウナギ鍋」は塩煮／「採鹹・ せんごう土器」の定着に果たす古鬼怒湾ウナギ塩煮の役割に注目！ (シオ9)シカやサルが舐めていた「縄文山塩」の発見と「山塩煮」の縄文鍋 (シオ10)「微小貝類から想定される「葦灰」製塩の可能性」？？アマモは「藻灰」×「草灰」○ (シオ11)「製塩土器」に観る「大宮台地系列」(馬場小室山)、「武蔵野台地系列」(正網・下布田)
新展開4	「タマきみ(君)」の 「限界思考」打破	ヒスイ製勾玉・小玉の晩期流通(関東各地域拠点でも製作)と弥生時代中期中葉「再葬壺棺 墓」への流通実態(上越周辺北信経由)解明 (タマ1)熊谷市飯塚南遺跡の土坑墓出土ヒスイ製勾玉と飯塚遺跡群 (タマ2)長野県坂城町保地遺跡の抜歯人骨とヒスイ製垂飾品の年代【『利根川』39】

1.【地域とパブリック・アーケオロジーの底力】：各地域における自然の恵みと基層文化の形成を考えよう！

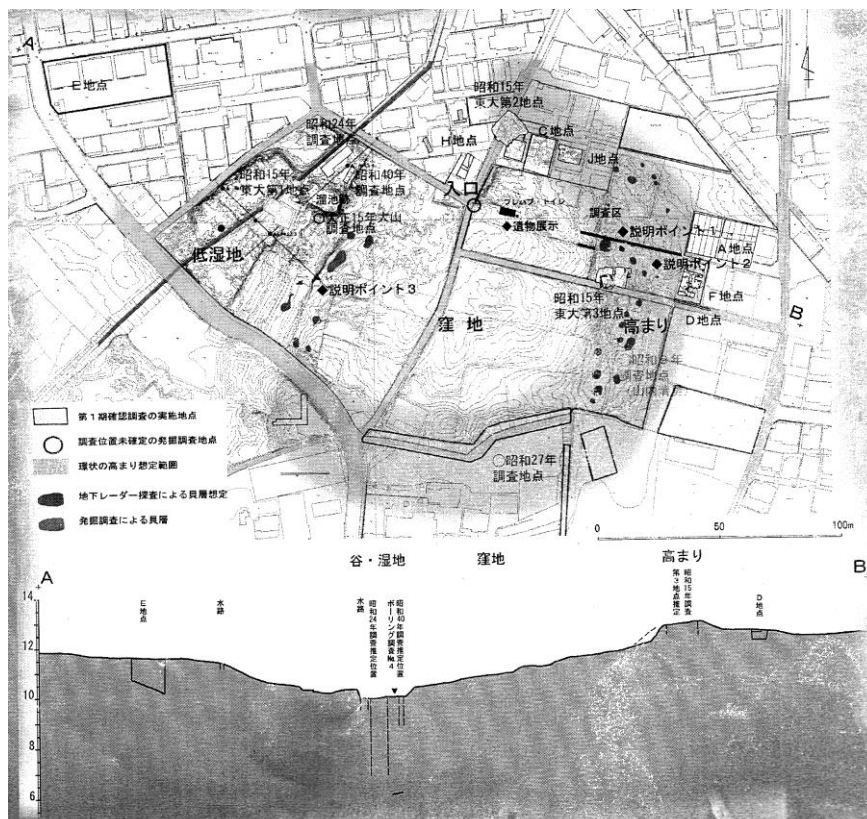
1-1. 馬場小室山遺跡の晩期研究：大宮台地周辺における晩期集落の新展開

(1)【集落】土塚をつくる集落と窪地に向かう集落、そしてその分岐点は晩期前葉集落！

・さいたま市前窪遺跡は窪地に晩期中葉の集落：中葉後も晩期後葉「前窪式」～末葉「氷Ⅰ式」期集落を形成



・さいたま市真福寺貝塚も晩期中葉には窪地集落を形成：晩期中葉の窪地形成にはローム層の削平も関与！



(2)【葬墓式】馬場小室山遺跡の巨大土壌は次の入植者にはどのように見えていたか？

- ・「第 51 号土壌」はその上部に「浮線文系土器群」の埋設土器 3 個体が検出され、第 32 次調査でも「第 (13・14)号土壌」の上部にも「前窪式」頃の埋設土器(粗製土器様式)1個体が検出されています。
「第 51 号土壌」と「第(13・14)号土壌」は共に土饅頭状の高まりがあり、御柱状の墓標を立てた痕跡が見られる状況から、「前窪式」～「浮線文系土器群」の頃の景観を復元すると、土饅頭の頂部は木柱が朽ち果てて凹んでおり、「安行3d式」終焉後に前窪遺跡に入植した人々がここを墓地として選定したと思われるます。

(3)【「シオ(塩)もん」研究の新展開】：馬場小室山遺跡の「製塩土器」から分かる異系統融合による共生状況

I. 序：『利根川』40掲載の常松成人氏「製塩土器」形態学への感想文(2018-4-27のメールから)

・From: 鈴木 正博(自宅) / Sent: Tuesday, March 27, 2018 7:54 AM / To: tsunematsushigeto

常松 成人 様

★ゴシック体は今回レジュメ用編集

おはようございます。鈴木正博です。利根川 の 原稿、ありがとうございます。

タイトルは六十軒東遺跡シリーズに変更する可能性があります。その時には頂きましたタイトルは副題となるかもしれません。宮田編集長の裁量になります。

さて、頂きました原稿は、最近の風潮は製塩の議論ばかりで土器の形態学が展開されずに面白みに欠けていましたので、タイムリーな視点だと思います。あくまで「製塩土器」と呼ばれた土器群の年代学的系統学的議論が什器として特定の様式化を図る生業との関係で基盤研究として必要に思う次第です。

ご参考までに、このナデ系列は正網遺跡の報告で、「製塩土器」とは分離し、無文粗製土器の6類と7類として示した作法で、第36図1-7にあります。が、「非常に薄手で一見所謂製塩土器作風のものの」で「器面に指押え痕或は輪積み痕がある」としたものです。古鬼怒湾の「製塩土器」との比較で今後問題となる土器として形態学的に予察しておきました。奥東京湾の「製塩土器」を考える際の形態学的ポイントとして参照下されれば幸いです。

この延長として輪積み痕に代表されるナデ系列も含めて、在地の粗製土器の作法が「製塩土器」にも影響していることが、古鬼怒湾との比較で導出されることになり、タイムリーな報告です。

以上、長竹遺跡の報告書が刊行されました折には、実見の機会を得たいと思います。

II. 研究史：正網遺跡の研究：(1989)『富士見市遺跡調査会 研究紀要5 正網遺跡—荒川右岸における縄紋式後晩期遺跡の研究—』、埼玉県富士見市遺跡調査会

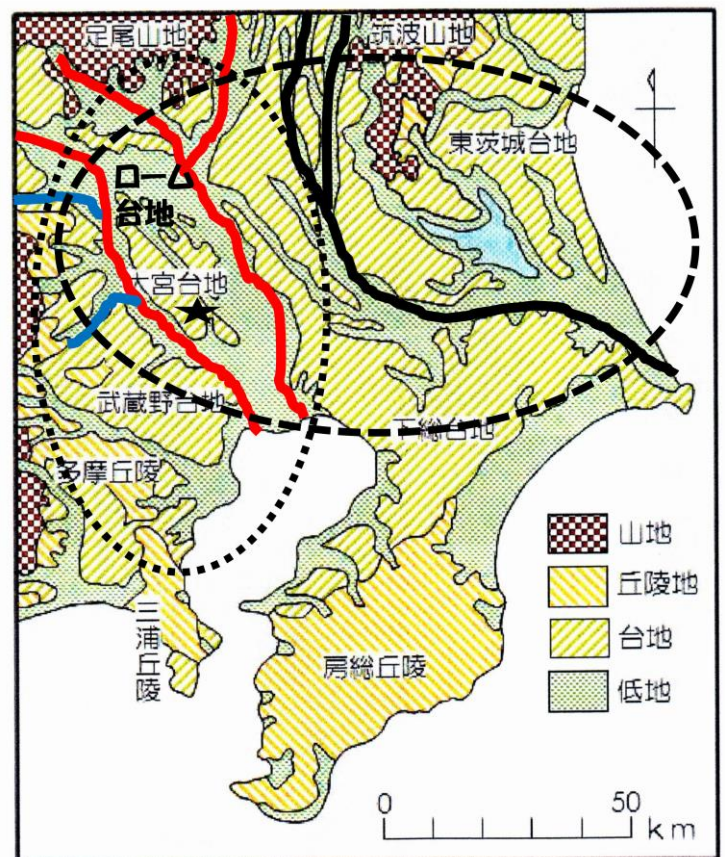
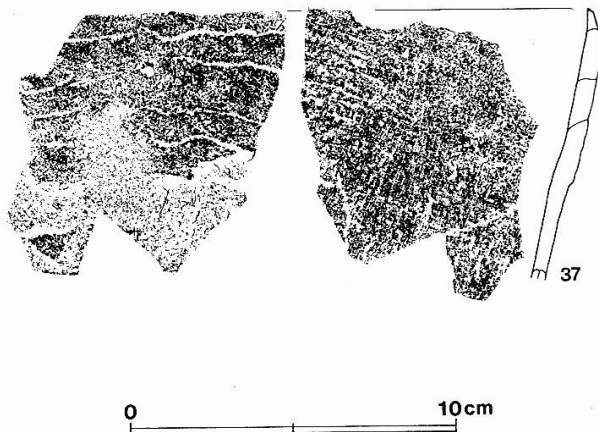
- ・正網遺跡の報告では「製塩土器」と認定した土器群は古鬼怒湾の「製塩遺跡」に類例として見られるものですが、それ以外にも「非常に薄手で一見所謂製塩土器作風のものの」で「器面に指押え痕或は輪積み痕がある」資料(仮に「類製塩土器」と仮称)が認められる現象に大いに悩みました。安行式の貝塚が形成されない富士見市ではいつの時代に在っても土器製塩を行える自然環境ではありませんので、「類製塩土器」それ自体の意義も判然としませんでした。そのために漠然とはありますが、「類製塩土器」が「固形塩」を作るために「製塩土器」を模倣したとはとても思えず、「固形塩」用の「製塩土器」と理解するには「製塩土器」も含めて無理があるのではないかと考えました。ある意味で「固形塩」からの解放を報告書に示しました。
- ・その後、1992年の川口市精進場遺跡は「安行3c式」を中心とした予想に反して10点と少ない検出例が、「製塩土器風」として報告されています。

III. 東京湾との往還モデルの構築：「製塩土器」に観る馬場小室山遺跡の重要性！

- ・2004年10月からの馬場小室山遺跡救済活動にて、発掘調査終了後の掘り土の中から「製塩土器」の破片を5点救済することが出来ました。大宮台地では中々表面採集できない小片ですので、『第3回 馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム 語りつぐ「見沼文化」』誌上で常松成人氏により丁寧に紹介いただきました。
- ・学生時代に遡りますが、川口市石神貝塚の東貝塚発掘調査に参加した折、晩期前葉の混土貝層から「製塩土器」の破片がパラパラと出土し、生育の良いヤマトシジミ環境でかつ漁労活動の活発さにより茨城県取手市中妻貝塚との類似関係を想起しましたが、馬場小室山遺跡との出会いにより、改めて両者の関係を見直すことにしました。
- ・中塚貝塚の場合はラグーン地帯の台地上「市場遺跡」であり、下流域に低地性砂層「製塩遺跡」の存在を措定していましたので、同様に石神貝塚も下流域の東京湾に低地性砂層「製塩遺跡」があり、馬場小室山遺跡も同じ方面に丸木舟により往還する生業活動を考えてみました。

IV. 「製塩土器」に観る「大宮台地系列」(馬場小室山遺跡)、「武蔵野台地系列」(正網遺跡・下布田遺跡)の新展開と「接圏地域」：馬場小室山遺跡『第32次調査報告書』(20015)の所謂「製塩土器」とは？

- ・正網遺跡や下布田遺跡に見られる「製塩土器」としての違和感は、在地の(無文)粗製土器の作法に由来しています。「製塩遺跡」が調査され定義された「製塩土器」(これを各年代における「古鬼怒湾系列」と命名)とは、特にケズリ作法において顕著な差が見られますので、新たに「武蔵野台地系列」と命名します。他方で馬場小室山遺跡『第32次調査報告書』掲載の「製塩土器」には下図左37のように輪積み痕とその上のナデ作法が顕著な例も多く見られますので、同様に「大宮台地系列」と命名します。これは大宮台地北部の無文粗製土器の影響に他なりません、大きな特徴としてよいと思います。
- ・下図右は縄文時代の河川(黒:鬼怒川/赤:渡良瀬川・思川と利根川/青:荒川・入間川)を示していますが、横長の長破線が「古鬼怒湾系列」の分布概念図、縦長の短破線は「大宮台地系列」と「武蔵野台地系列」の総和の分布概念図です。大宮台地は双方の分布圏が複合する「接圏文化」を構成しています。このような「接圏文化」の形成は近藤義郎のように「製塩土器」を固形塩生産の土器製塩用と見做す考えでは、特に海水環境と「製塩土器」製作遺跡との関係に無理が多く、土器製塩用ではなく、その前工程で濃縮鹹水として完了させる「採鹹・せんごう土器」と考えるに至りました。濃縮鹹水による希釈ネットワークの背景には大型魚の塩蔵以外にも注目し、大潮時の仕掛け漁の小魚類やウナギ等淡水魚の「塩煮魚食文化」の定着が推定される。こうして「製塩土器」研究は「採鹹・せんごう土器」の形成として21世紀に相応しい新展開を遂げることになるでしょう。



1-2. 「山田湾の蝦夷考古学」の動向(3)：文字から離れた地域で「モノ」を観る！

(1) 五十嵐聡江(2018.7)「陸中・房の沢古墳群と山田湾の古代社会」『古代』第142号

要旨 房の沢古墳群は岩手県下閉伊郡山田町山田に所在する「末期古墳」である。本稿では、房の沢古墳群の歴史的展開と変動を形成する群構成、地域社会としての特徴を検討した。その結果、房の沢古墳群には、隣接する沢田Ⅰ遺跡の集落の盛行期と移転期に同期した変動が認められ、群構成から家族など系統の近い関係がある程度纏まって墓域を形成していたと考えられる。副葬品の組成や埋納方法からは、造営者を内陸からの移住者と想定し、盛行期には内陸と海道の双方との交流が活発化する様子がみられ、さらに古墳群は出自や職掌の異なる複数の集団で共有されていた可能性も指摘した。また、三陸に位置する長根古墳群との比較からは、同じ墓制を共有しながらも副葬品からは差異が認められ、これは山田湾と宮古湾の蝦夷集団の系譜の違いと考察し、山田湾の古代社会解明にむけての足掛かりを得ることができた。

・「山田湾まるごとスクール」では、無文字社会の末期古墳群から、蝦夷の経済活動と律令社会との緊密な関係を読み解きます。そのためにも蝦夷を「エミシ」と読む立場を明らかにし、「山田湾1式」～「山田湾7式」まで制定し、**在地の人々を主人公として命名した意義**を確認したいと思います。

(2)「蝦夷」という表記について：松本健速(2018)『市民の考古学15 つくられたエミシ』、同成社

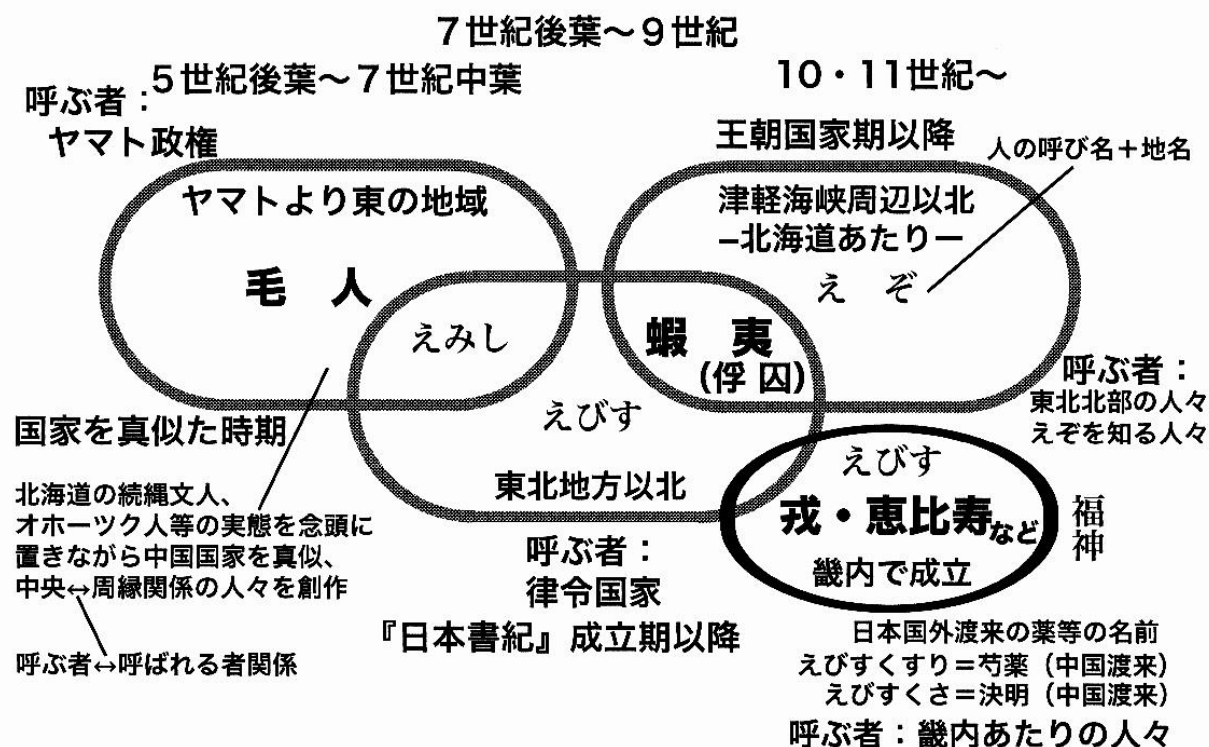


図5 「蝦夷」表記が指す対象と呼ぶ者の変遷

表7 「エミシ」「エビス」「エゾ」表記の変化とその背景

	7世紀中葉以前	7世紀後葉～9世紀	10・11世紀～
表記	毛人	蝦夷 (夷俘、俘囚、狄)	蝦夷
読み	えみし	えみし・えびす	えぞ
地域	おおよそ関東～中部	おおよそ東北～北海道	東北北端部～北海道
国号	倭国	日本	日本
政治体制	ヤマト政権	律令国家	王朝国家・中世国家
文献	『宋書』倭国伝	『日本書紀』等日本国正史	和歌等
対象読者	中国の政権	中国の政権、日本の政権	非政治的

1-3. 縄文時代後晩期の「土器型式」ワークショップ：来年度に実施する「青空考古学教室」の準備

- ・茨城県常総市(旧石下町)崎房新田遺跡の未発表資料(その2)を分類します。
先般分類しました未発表資料(その1)に匹敵する量があり、石材・石器も含まれていますので、崎房新田遺跡の文化が明らかになると思われます。

1-4. 縄文時代の自然災害(「噴火」・「地震」・「津波」・「洪水」)遺跡：今回は「洪水」を探り上げます！

- ・長野県では千曲川の氾濫が著名ですので、寺内隆夫氏による屋代遺跡群の紹介を引用します。

②……………縄文時代における氾濫低地の利用

縄文時代は氾濫・埋積の時代であり、地表面の安定期と不安定期が繰り返された。安定期には植物が繁茂し、人間活動の痕跡が残されている。安定期の中でも、比較的豊富な情報が得られ、開発と呼べるような行為が認められたのは縄文時代中期後葉（加曽利 EII～IV 式併行期）である。

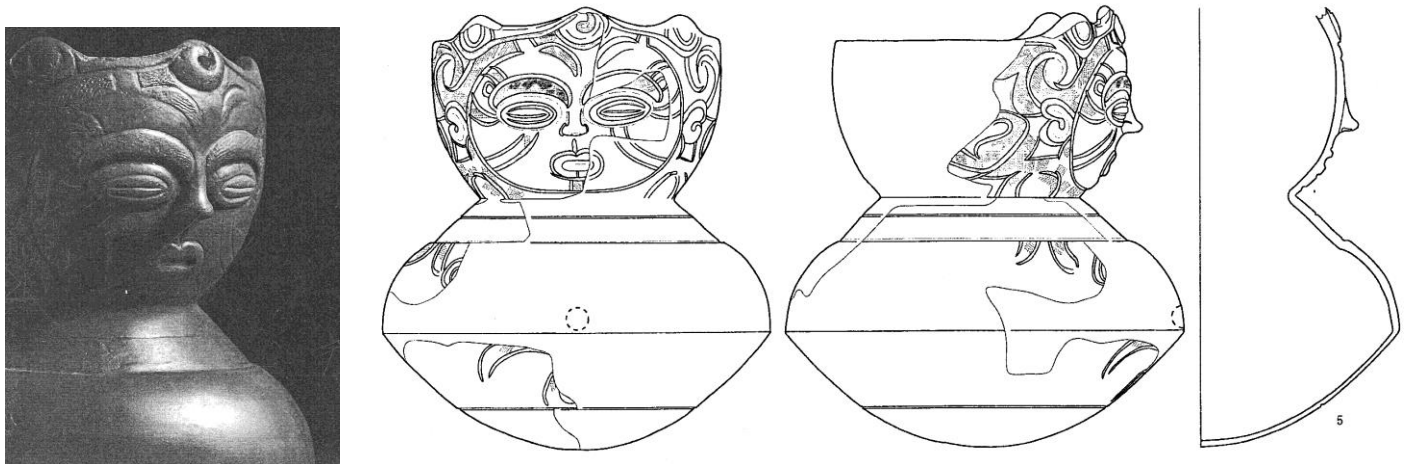
中期後葉集落（XII-2 層）から検出された植物遺体を見ると、中期前葉集落（XIV-1 層）に比べてクリの急増が特徴的である。また、集落内に 1 本だけ炭化して残存していた立木はオニグルミであった。こうした点は、クリなどの有用樹種を選択的に管理・栽培していた可能性が考えられよう。また、XII-2 層は、集落を離れた地点においても炭化物の含有量が多い点に特徴がある。多量の炭化物の分布は、人為的・継続的な「火入れ」行為も視野に入れておく必要がでてこよう。これは、焼き畑などの開発形態を想定したものであるが、今回の調査では植物の栽培を明確にすることはできなかった。一方、草地の創出は、イノシシやシカといった狩猟対象獣の増加にも繋がったと見られる。また、集落内では雑草類の種実が多くなっており、開地化していたことが判っている。

想像をたくましくすると、縄文時代中期後葉には、集落周辺やその南に広がる低地林が伐採や「火入れ」によって開かれ、クリやオニグルミが優先的に保護されることによって、氾濫低地の生態系が大きく変えられていった可能性がある。しかし、こうした開発形態が長期的に継承されるほど気候や地形は安定的ではなく、後期前半以降、再び砂の堆積が進む時期が繰り返される。

2. 【「ムロさま」の話題】：人面文土器や顔面付き土器・土製品などについて考えます。

【番外3】青森県の「縄文の微笑」(写真)：津軽ダムの西目屋村川原平(1)遺跡にみる顔面付注口付土器

★実測図では「縄文の微笑」の表現がむずかしいのか、あるいは見ようとなしないのか、印象が微妙に違う！



4. 【その他情報交換など】：自由な意見交換とワイン・アーケオロジー

4-1. 今後のワークショップ関連日程について

- ・10/27(土)：真福寺貝塚現地説明会
- ・12/2(日) or 12/23(日)：第92回「製塩土器」ワークショップ
- ・1/20(日)：第93回「再埋葬」ワークショップ
- ・3/3(日)：第94回「山田湾まるごとスクール」ワークショップ

★3/2(土)・3(日)の両日はコムナーレフェスティバル

- ・3/31(日) or 4/7(日)：第95回見沼田んぼ de お花見ワークショップ
- ・5/4(みどりの日)：馬場小室山遺跡のクリーンアップと青空考古学教室、続いて第96回ワークショップ

4-2. その他

以 上